はせを翁繪詞傳

へ 5
4454

石渠閣藏

へ5
4454
門へ5
4454

芭蕉翁は其先は桓武帝柏原の御門乃流なりけり
常陸守平正盛の中比の人のすゑにて右兵衛尉平季宗
その子に彌平左衛門尉宗清といふ人ありし六波羅乃
入道相國は一門なりしかとよせおもく平家の士は
中にもかの宗徒の人にてもちらすへき兵なりしといへとも

愚按東鑑ニ弥平左衛門尉　大系図ニ右兵衛尉季宗子宗清
武家系図ニ左衛門尉季宗　弥平左衛門尉宗清
参考保元平治物語ニ弥平兵衛宗清平季宗子

昭和九年十月二日

平治の乱に左馬頭義朝の男右兵衛佐頼朝を
生捕るに宗清出家をふきまとふて世ふなく
ゆきとはすまいらす駒けるとき宗清うまのもの人を
池の尼とも申奉るる形勢を見て我子共を
面前にゆるすかゆるすかあるべきと入るとおもへ
ゆるさるゝ方ゆるさるゝ形勢にて下知をもとめつゝ形勢の
あるをもひ伊豆の国へ流るゝ方はたれけるとき折ふし
宗清もとゝに名残をしくて遠く近江の国にても

見ん宗清まいらせ駒をとゝめて世をはなれて出家
おとゝへ源氏ハ清盛へ頼朝形勢ハ鎌倉殿にて
駒ひきとゝになり給ふにまもなく池の尼御前やや
宗清兵衛の方なるゆゑ息をおもゝ死ゆく
尼御前の方ハ池の大納言殿ありて清二位
こゝて形ハ生きゝ世清盛のとゝ形勢この
方にうへてゝ方ゝ子ゝ方ゝ宗清兵衛尉
ゆゝ異ゝて猛金ゝ方ゝ形ゝ方ゝ

ねもとちかに伝送られ給ふ一門を筑紫西国へ
落ゆくに大納言をひかせ奈国ふかう向ひ給ふ
ひかるゝふ宗清をもつて伝けるゝ
宗清いかゝ戦場に向せ給ふをもつておのれ
すゝめて先陣ふ渡ゑ給ふおのゝ身ハ海つゝをもて
鎧金へ下向ゝ給ふ御一門のゝ伝送れめ給ふ
ふハ四のめいかくをもて給ふ君ハ奈国に下向
給ふ遠しおのれハ西国ふはせ下ゑ給一門乃

法先途をゝ見なゝ伝送れ給ふ者ハ
ハ存ぜ給ふ弓矢とる身ハ本意ふてひをのゝ
云に大納言ハ安ゝ所ふ
海ハ成ハ給ふ奥へ世ふ
とかゝふ西へ向給ふ
ゝ人ゝ伝送ふ
ハ社ハ給ふ西国へ下向
ふせなゝ給ふ

拓植氏に成り給ふ事もとゝめ
とゞまれども成ぬ故に小さかりしを
ものゝ成ひて住給ふ故に家清と師三郎といふ

愚按東鑑巻三武衛招清池前亞相給是迫日向前
帰洛之間為餞別也中略武衛先召弥平左衛門
尉宗清左衛門尉季宗男平家一族也是亞相下著最初被
尋申之處依病遲留之由被答申之間定今者令
下向歟之由令思案給之故欲而未參著之旨亞
相被申之太違亨主御本意云云 此宗清者池禪
尼侍也平治爲事之刻奉懸志於武衛仍為報謝
其事相具可下向給之由被仰送之間亞相城外
之日示此趣於宗清云令向戰場給者進
可候先陣而倩案爾東之招引為被酬當初奉公

歟平家零落之今參向之條尤称恥存之由直參
屋嶌前内府云云
愚按東鑑ハかくあれとそのまゝに宗清の孫なりしを
つまびらかなるされハ伊勢の蕉翁全傳あるハ伊勢の國人の
說にもとゝふそうゝへ大系國に宗清ゝ母の系譜ゝ拓植弥平左衛
尉宗清妻家清母と家あり伊勢ゝて拓植と号したるなるん
もとゝゝ國時に國國同弘服部の人に服部平内左衛尉家清の
これ学ふいふ伊勢ゝ家内左衛尉之なも拓植に伊勢松尾と号家後
夫より五代を経て清正といふ人に子あるを
家をわかつて山川縁の西川松尾北河と名乗る代
拓植氏に住ゝて実に松尾與右衛門と号せ人
もゝめて國ゝ府なる上聖ゝ赤坂ゝ住りとゝれ

蕉翁の父なり母ハ伊賀の国の人とや姓氏
ハ[illegible]なりあこ[illegible]子二男四女あり婦[illegible]義康[illegible]
命清[illegible]平左衛[illegible]いふ二男半七郎宗房[illegible]名
金作[illegible]蕉翁なり[illegible]ほ[illegible]名を更て忠右衛[illegible]いふ
西[illegible]めに生[illegible]服部[illegible]の伝[illegible]て[illegible]藤堂
新七郎良精乃嫡子[illegible]計良忠[illegible]仕へら[illegible]
良忠[illegible]弾[illegible]吟[illegible]いふ弓馬の[illegible]
に[illegible]和歌[illegible]流[illegible]て

[illegible]時[illegible]
家[illegible]

愚案蕉翁俗名藤七郎とあり藤堂
氏家臣半七郎とあり[illegible]
[illegible]派[illegible]
[illegible]尾氏[illegible]
伊賀の国人[illegible]

[illegible]

けるを寛文六年四月と云ふに思ひ合すも
主計殿ら社家宗房殿なる故
遺教を旨に如何ぞ
ねをしまるも　愚案吉野山社家報恩院の過失歟
遺教の後世松尾忠右衛門と記せり
頻りあの世我は知なれども
せちなりを稜ハ以へかり毋ける
久武はけんあるをしらをしてゆるをハ
おもし秋はすなるをもをは館ら

家をしけるを毋門乃如をそらをる松を
こへ生をを木をの伊家乃隣なる城孫を生ら
門はけ〳〵を殺〳〵経柵にして押なる毋白
雲ゆ〳〵を毋を出をの社
愚案此時良忠の子息良長はをこ家なけを宗房二なく
忠ををを〳〵し家を傳し〳〵むさをハ續枝桑陰遺稿第二卷
芝蘭齋傳ま仕府主君而有忠勤ゑ宗房の伊し家ハ上野
玄蕃町と云ふ所ま住りり

かくて延寳のはしめまてハ猶都雲水の境にさすらひ
出てしより東の山にやすらひ海のほとりにさまよひ
志の原にわたれる乃ゑにやむかし妙なる物をもとめて
深川のほとりに住居をしめて芭蕉を栽るによりて
門人芭蕉庵と呼ひける心にや其株を[illegible]
茂り[illegible]庭をせはめて葉の影に[illegible]
かはりなき人も芭蕉庵とよひてやかて
世の人も芭蕉翁とは申しける

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

此菴是より住菴をさためてこの庵を芭蕉翁と呼ひ
しよりこれ江戸にて四十餘まていたらんとさらに此道の師とせし
季吟湖春父子にもわかれて翁の号をとりくる事もひとへに
隠遁の志あつかりけるにやはしめの名ハ桃青といひ号を
風羅坊とも云しも芭蕉といふ名にかくれて世に知られ
ぬをよしとし芭蕉をも観せしにて一名を泊船堂とも名付しも
深川の海のほとりに住して門泊東呉萬里船の詩の
心にかよへハなるへし　隠逸傳にも造廬於深川扁號
泊船堂云々

つれ〳〵なる折ふし笠をはりて絵に詞あり
秋風たひしきにおもし竹を割てくみになし
妙観か刀をかりてこつ巧をえて竹をまけて
笠つくりの翁となのる巧拙けれは日をつくして
ならしてまするか紙して渋といふものに色を
そめいさゝか漆をほとこして堅からん事を
要す廿日すくるほとにこそやう〳〵出来けれ
笠のはしの斜に裏にまきいり外に吹かへりて
ひとへに荷葉の半ひらくるに似ておかしき

姿なり西行法師の侘笠か東坡翁の雪見
にゆかん宮城野の露に呉天の雪に杖を
杖をやひかん霰にいそき時雨をまちて
そゞろにめてゝ殊に興す興中俄に感する
ことありふたゝひ宗祇の時雨ならねともかりの
やとりに袂をうるほして笠のうちに書つけ
侍る

世にふるもさらに宗祇のやとりかな

芭蕉夢合三

芭蕉夢合四

あるかなきかの雲みねにたちのぼりて火おきてい
ぶすまの山のやまもめぐりてやがてくるふ雪
ちりのみとりのうすはあるまはあるなる清水の流れ
かすみたちこめて深きとこの紅かたにて
まぬれ袖ひていとゆく如くに雪をおしとりなる
恨ちとひとりあるあ風の雪ふきまぬ
ちとこまのはけるやうにや

[illegible]園先生大巽和尚の周易の
文にくはしくおぼえたる人菊地宏圭
[illegible]ひ[illegible]ふかく[illegible]ひけきい萃[illegible]
卦にあくまでこと[illegible]の風ふきたれ
雨にたゝれなく[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]典[illegible]
[illegible]議[illegible]
[illegible]享元[illegible]
[illegible]

義[illegible]

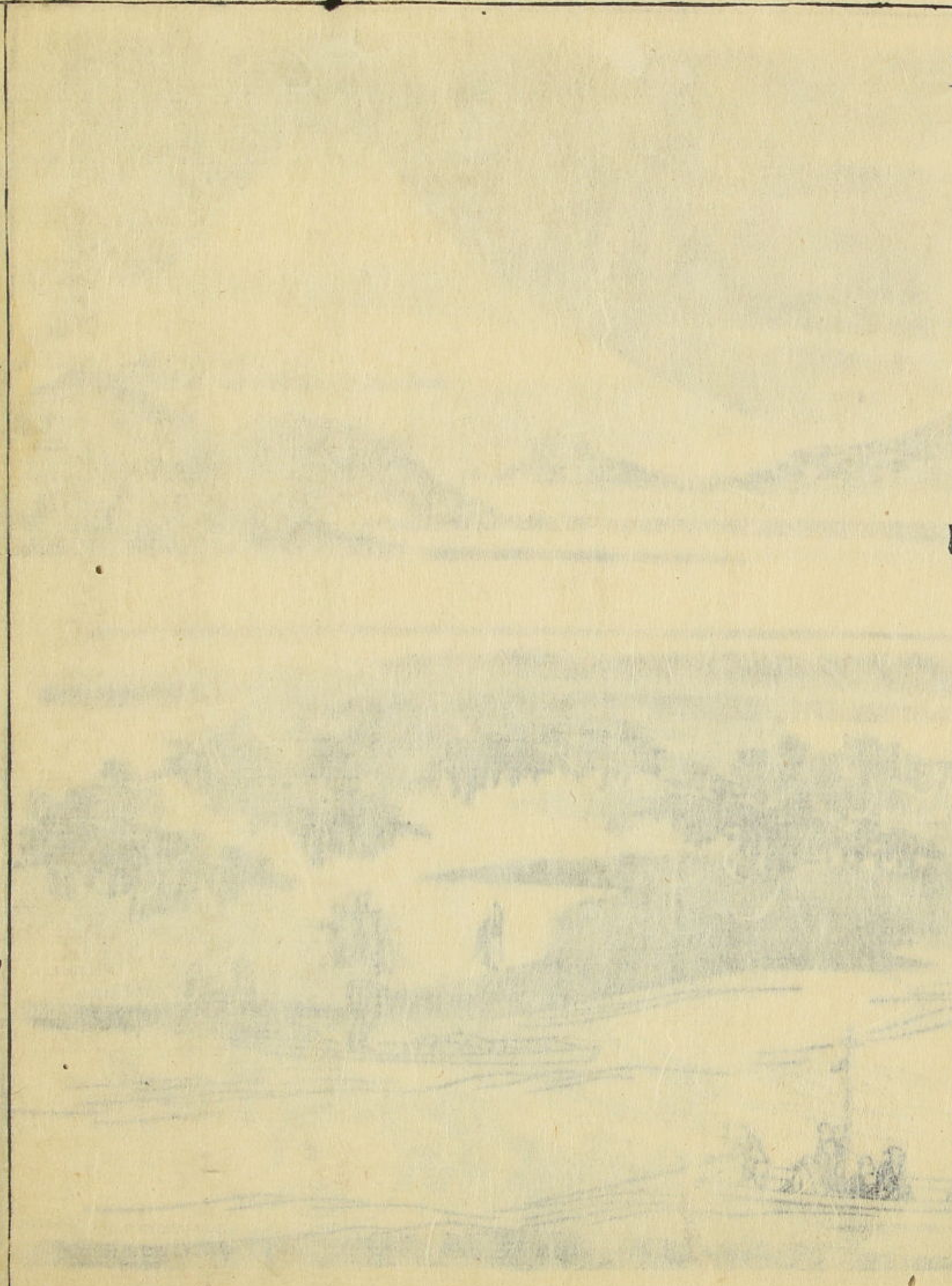
江戸[illegible]
[illegible]
[illegible]

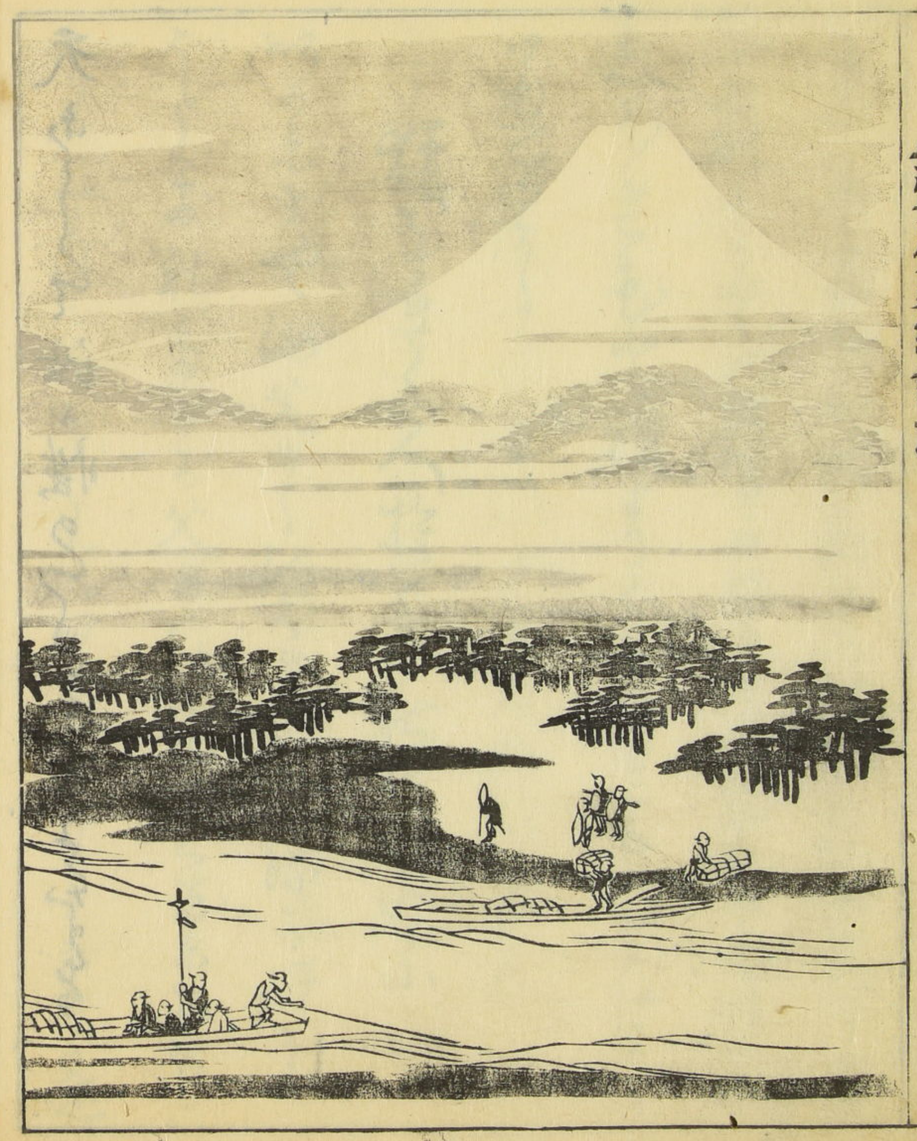
まじく露ばかりの命まつ間と捨おきけむ
小萩がもとの秋の風こよひやちるらんあすや
しほれんと袂より喰物なげて
通るに

猿をきく人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝父にゝくまれたるか母に
うとまれたるか父は汝をにくむにあら
じ母は汝をうとむにあらじ唯是

天にして汝が性のつたなきをなけ





芳野の奥に入給ふ所に人の子共の童共あそぶ奥の
院より二所詣する山入る所に紫人共の物ふるこ共
わつふ共へてたちしまい谷伐へるもてる源いゆとせとふ
かれ共くく乃清水ふむ共しふかしさ共あとをへて共くくとも下臨
けり

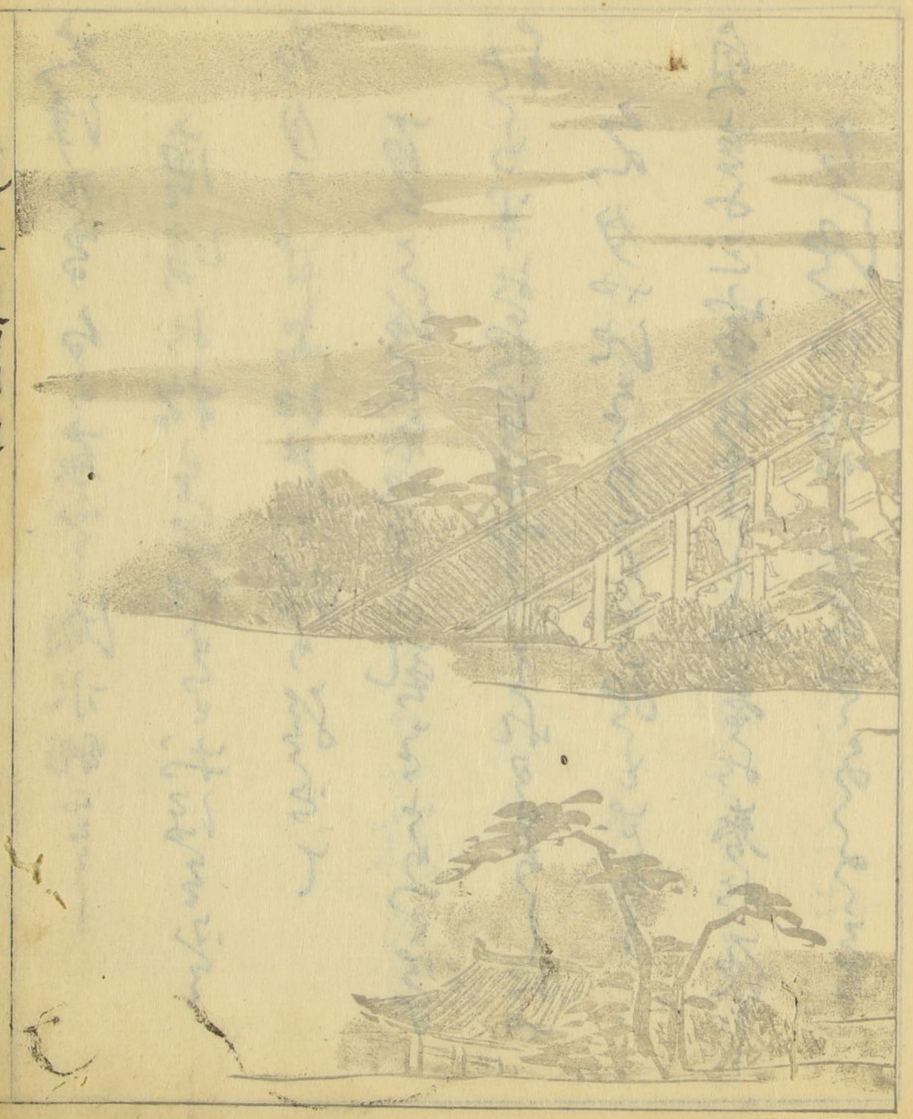
露ゆくくらつるふ夏世すらはや
伊勢ふすまして孫りて西行法の姫とのたまれ
星ふ女乃もとあくふもとうたて
芹洗ふ女あくふ歌よまま

長月のはじめ古郷に帰り給ひけるに北堂の
萱艸も霜かれはてゝ今は跡だにも
なかりしかはらからの鬢白く眉皺
よりて只命ありてとのみいひて兄の守ふくろ
をほどきて母の白髪おがめよ浦島の
子が玉手箱汝が眉もやゝ老たりとしばし
泣て

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

貞享二丑のとし伊賀の山家に年を迎へ給ひて
涅槃を嵯峨に催しゝの年
奈良の二月堂に籠り給ふに

水とりやこもりの僧の沓の音



大津乃雪の家に潮水飛至る

唐崎の松を見ぬ人は江戸に帰りて

夏の夕乃涼江戸に帰りて

秋も半ばの月見ぬ人にや

名月や池をめぐりて夜もすがら

貞享三寅年仲秋十五夜

吉野山詣

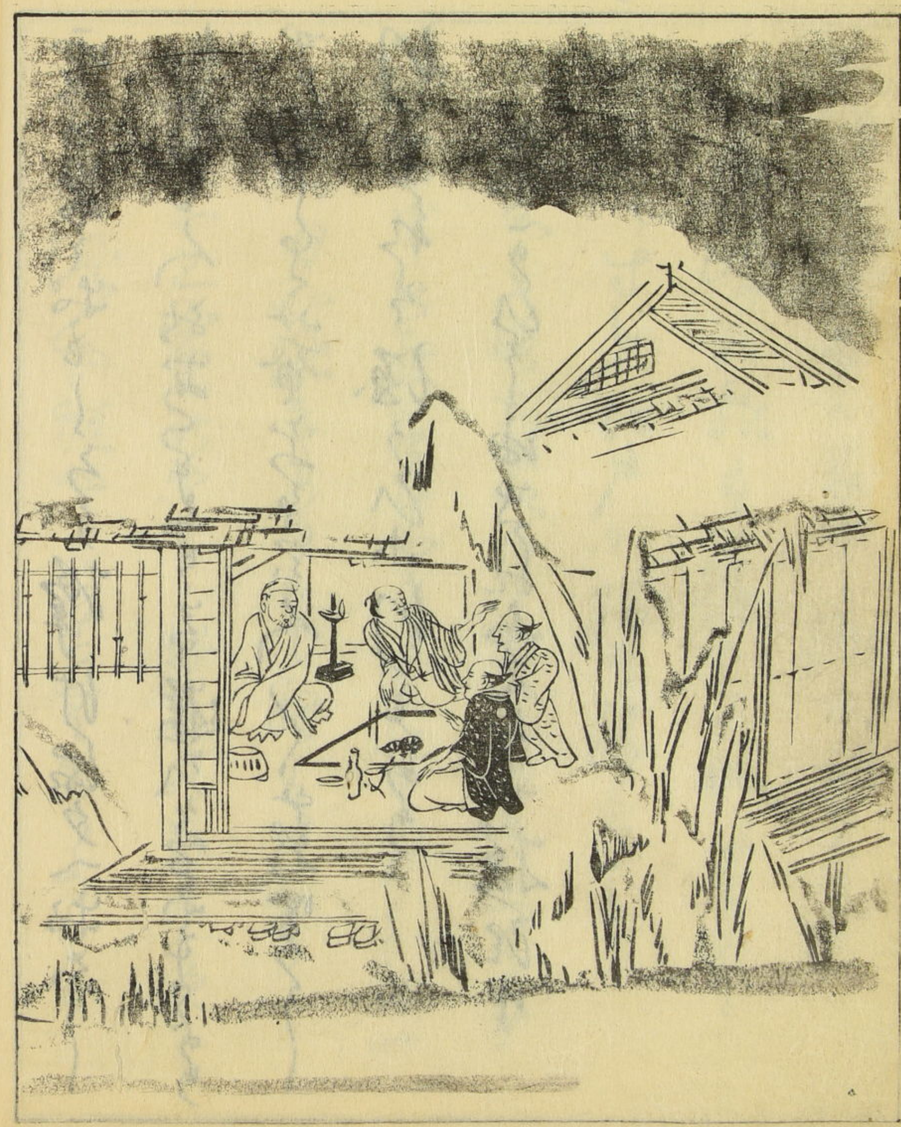
雪の山〻おもしろう降けるかな

山路を人の行あるもあり遊びあるふもあり

まつしろな菊なる人〻影写る

りあれを源氏ふりあり

米こひ山ゆきふれふるや投げ出



貞享四年秋芭蕉翁出羽の国に旅立ち
給ふ雲霧夕暮なるし

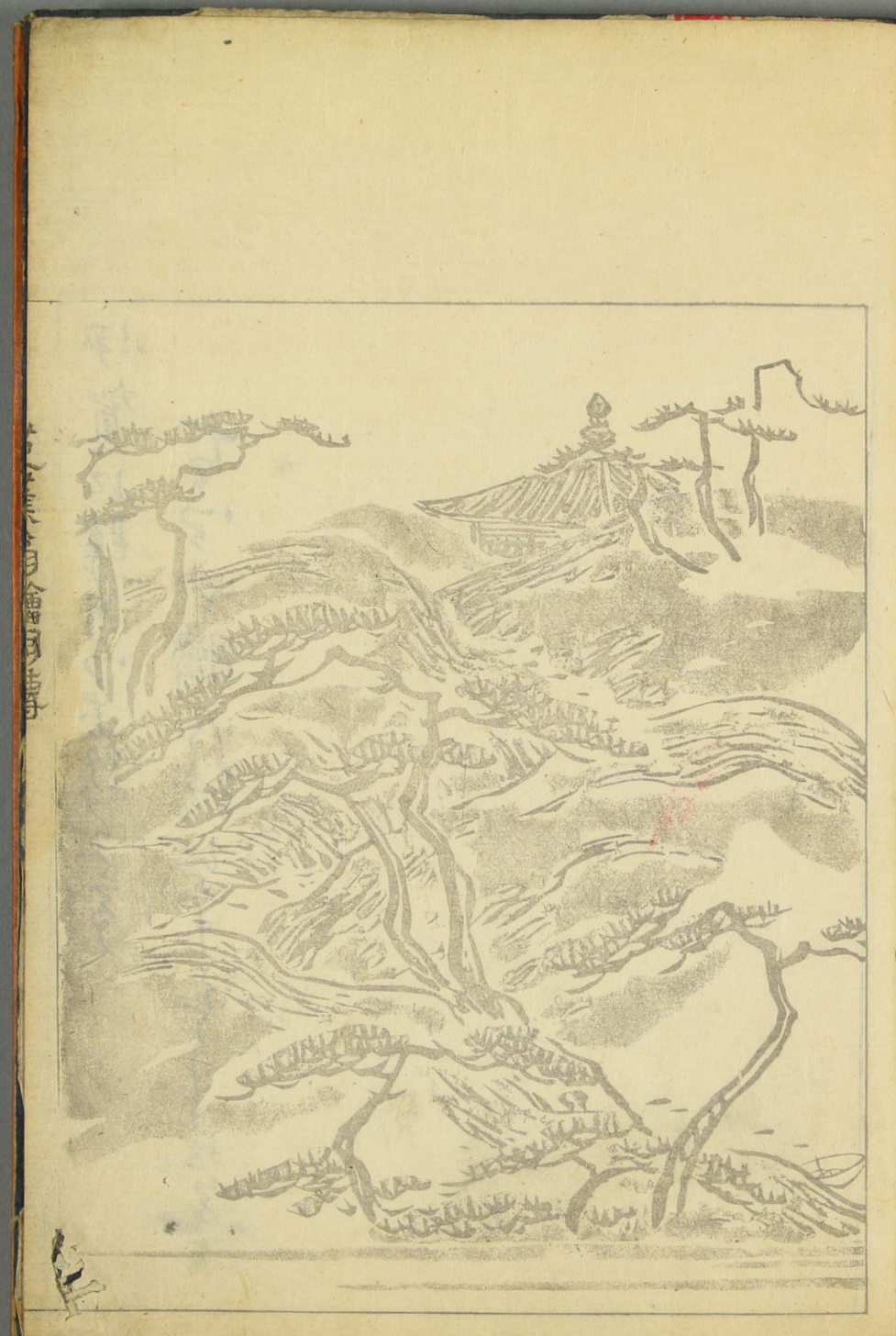
奥州に雲霧上野の湖水
笠の内ぬきて月に対し雨
を聞ぬ夜の月雨に降るも
あるべしと
振捨て寺に籠る人有て
ふるまひ
吟じ
清浄の心を洗ふ

寺々
題
月見
異按こゝの記かゝ方記ありこれ和尚に佛頂
禅師として江戸臨川寺に住持し給て蕉翁参て
参禅し給ひけるとさ
佛頂和尚
三國相承宗乎統譜に臨川佛頂芭蕉翁桃青と法脈
を記す

秋風に
月
しめ
雲
ふ
風雲
心
旅人
家
河原

来るべきよりくるべき筆ぬれハと思ふ日ぬれ乃雫すめ
るこゝろめて杖突坂とのあるを思ひ合ゝ
かへめて馬よりとゞぬ涙ふれ旅人や
出てゝ雨ひけんあるを思ひる士に志ゝ社
なとのゝ

歩行者ハ杖突坂と家馬ふ



伊賀に歸りつゝ

古里や臍の緒に泣く虫の聲

十